

# 「井伏鱒二著作年表稿」手控え 2

前田 貞昭

## はじめに

本手控えは、現物未確認のまま既発表「井伏鱒二著作年表稿」に掲出したものの内、新たに現物を確認できたものについて報告し、加えて、誤脱・記述の不正確を補綴することを目的としたものである。なお、対象期間は、既発表「井伏鱒二著作年表稿」で対象とした昭和11年から20年までである。

本手控え作成に際しては、高崎隆治氏・林眞氏・山内祥史氏・坂敏彦氏に御教示や資料を頂戴し、阪急学園池田文庫、日本近代文学館、日本大学総合図書館、早稲田大学演劇博物館、国立国会図書館、東洋文庫、小学館編集総務部資料課の資料を利用させていただいた。資料の入手に当たっては兵庫教育大学附属図書館情報サービス係の諸氏、小学館編集総務部資料課の小林勝夫氏には格別の御尽力を賜った。記して感謝申し上げる。いずれも、怠惰な私にとっては、得難い励ましであった。

なお、凡例は本誌に掲載した「井伏鱒二著作年表稿（昭和10年）」の凡例と同じだが、筑摩書房増補版『井伏鱒二全集』以外の再録書については解題のところに記しておいた。

下記以外にも、まだ多くの井伏文があろうかと想像している。御教示を戴ければ、それをも追加公表してゆきたい。どのような些細なことでも、〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学言語系教育講座 前田貞昭宛てお知らせ下さるようお願い申し上げます。

## 昭和11年(1936)

御多分にもれず＝ユーモア小説＝

週刊朝日春季特別号・29巻16号・pp.190～195・4月1日(3月10日)・朝日新聞社・大道弘雄・30銭

挿画・河野鷹思。本文末尾に「(をはり)」とある。「井伏鱒二著作年表稿(昭和11年)」『兵庫教育大学研究紀要』11巻・1991年2月)に現物未確認のまま掲出したが、現物を確認できたので再掲する。

## 町内の話(一)～(三)

東京日日新聞朝刊・21628号～21630号・各7面・10月13日～15日

「井伏鱒二著作年表稿(昭和11年)」(『兵庫教育大学研究紀要』11巻・1991年2月)では、『山川草木』(雄風館書房・昭和12年9月17日)のみを再録書として掲出し、改題についても触れなかったが、「東京のお獅子」と改題して井伏鱒二

随筆全集2『山の宿』（春陽堂書店・昭和16年11月20日）にも収録されているので訂正する。

## 昭和12年(1937)

初めて逢った文士＝随筆＝ ⑨

俳句研究・4巻4号・pp.194～197・4月1日（3月18日）・改造社・山本三生・80銭

「井伏鱒二著作年表稿（昭和11年）」（『兵庫教育大学研究紀要』11巻・1991年2月）では「昭和11年執筆か？」として掲出したが、山内祥史氏の御教示により、初出現物を確認したので掲出する。『山川草木』（雄風館書房・昭和12年9月27日）に初収録の後、新選随筆感想叢書『蚩合戦』（昭和14年9月20日）、井伏鱒二随筆全集3『風貌姿勢』（春陽堂書店・昭和17年2月18日）、『風貌姿勢』（三島書房・1946年12月20日）、井伏鱒二選集6『架空動物譜』（筑摩書房・1949年2月25日）、『点滴』（要書房・1953年9月30日）に収録。

水鶏 ⑨

一橋新聞・251号・4面・6月28日

新たに山内祥史氏の御教示により、初出現物を確認したので掲出する。『山川草木』（雄風館書房・昭和12年9月27日）に初収録。のち、講談社文芸文庫現代日本のエッセイ『山の宿・晩春の旅』（講談社・1990年10月10日）に収録。

文芸時評（一）－誠実な態度・橋本英吉の「都会の華」－

信濃毎日新聞日曜夕刊・19955号・2面・11月29日（11月28日）

「井伏鱒二著作年表稿（昭和11年）」（『兵庫教育大学研究紀要』11巻・1991年2月）に追記しておいただけなので、改めて掲出する。12月1日まで3回連載。\*最近不思議に追悼号が多かった。『文学界』12月号が中原中也、『劇作』11月号が友田恭助、『四季』11月号が辻野久憲。また、『四季』12月号が中原中也追悼号を予定しているという。『文学界』連載の橋本英吉「都会の華」が12月号で完結した。「一つの物語として、いはゆる長篇の面白さを出さうなどといふ器用さは求めてゐない作品であるが、それと反対な立場に固定して自ら信じてゐる態度は立派である。」同じく『文学界』連載中の舟橋聖一の「岩野泡鳴伝」では、「舟橋君は岩野さんの小説と岩野さんの日常生活とを、あまりにも一如に論じてゐると初め私はさう思つてゐた。その感想を過日どこか雑誌にも書いた。ところが岩野さんの書き残したといふ今回の記録を見ると、泡鳴の小説すなはち泡鳴の日記であらうとの推測を促す感じがする。しかし私は泡鳴の小説から泡鳴の空想だけを掴みたい。泡鳴の作品について私の知りたいのは、泡鳴の空想だけである。」  
「すでに二十年前、岩野さんは英国の外交政策について疑ひを抱くものだといつてゐた。いま生きてゐたら『俺は諸君より二十年も新らしかつた』といふだらう。」  
「英国の外交政策や近状を批判する記事は、漸く今日になつて各新聞雑誌に見受けられるやうになつた。それ等の記事は一様に、英国の老獪な政策を憎む感情で

裏づけられてゐる。これまでおさへつけられてゐた気持が急に爆発したかの観がある。」「私も一度、林房雄や尾崎士郎のやうに観戦記を書きたいと思つてゐた。しかし私は立ちおくれた感じである。事変の始まつた当時、私は三好達治といつしよに上海か北支に出かける相談してゐたが、私みたいに気無精では従軍記者には向ないやうである。」三好達治の「上海雑感」（『改造』）は、「初めて戦地に着いた人の処女性が濃く感じられる。しかも筆者三好達治は、内地にゐる者の無用な臆測や流言を堅くたしなめてゐる。」岸田国土の「北支日本色」（『文芸春秋』）には、「私の知りたいと思つてゐた占領後の風俗が紹介されてゐる。」今月号の小説は、『文芸春秋』掲載の岡田三郎「玩具の勲章」、豊島与志雄「正夫の世界」しか読まなかつたが、「ふと私は岡田氏と豊島氏は共通してゐるところがあると思つた。それは作品が共通してゐるといふのではなく、二人とも年をとるにつれ作品の姿がそれぞれ明るくなつて行くことである。いひなほせば従来の重厚性を沈潜させ輕妙な表現を求めようとしてゐるのではないか。」「いま私はこの二人の先輩から何を学んだらいいかといふに、私の学びたいのはこの二人に共通する重厚性のある人間ぶりである。ころんでも起きても寝てもさめても、これを思ひこれを思ふ、文学文学と念ずる精神である。」

文芸時評（二）－岩野泡鳴と時局－

信濃毎日新聞第一夕刊・19956号・2面・11月30日（11月29日）

文芸時評（三）－重厚性と輕妙さ・岡田、豊島二作家に就て－

信濃毎日新聞第一夕刊・19957号・2面・12月1日（11月30日）

## 昭和13年(1938)

「ターキー」

少女歌劇・6巻2号・pp.20～21・2月1日（1月25日）・松竹株式会社事業部・山崎俊夫（土屋建樹）・35銭

「『井伏鱒二著作年表稿』手控え1」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』2号・1991年1月）では現物未確認のまま掲出したが、現物を確認したので再掲する。目次標題は、本文標題とは違つて括弧で括られてはいない。本文末尾に「（十二月二十一日）」とある。また、21頁上段には「水の江瀧子」の楽屋での写真と思われるものが一葉掲げられている。\*「少女歌劇の女生で私が正確にその名前を知つてゐるのは、ひとり水の江瀧子だけである。彼女がたいへん有名なせもあるが、この女生には私も三度ばかり行き会つた。」最初は、少女歌劇企画部の人たちが、文芸都市の同人に舞台稽古を見せてくれ、そのついでに女生数名を紹介してくれたのである。「その後二年か三年たつてから、或るとき新潮社の文学時代といふ雑誌から、私のところに」、「雑誌に載せるグラビアをとるために、水の江瀧子

といつしよに写真にうつれといふ通知」が来た。歌舞伎座付近の大きな劇場の衣装部屋の入り口で写真撮影をした。「その後また二三年たつて、東京日日新聞の註文で私は水の江にインターヴユウをとることになつた。」前の時は、「男のくせにターキーといつしよに写真にうつるのは、許し難いことだ」という、ターキーの熱烈なファンからの手紙を受け取った。「今度はファンからの攻撃」は受けなかったが、「そのかほり或る雑誌で、私のインターヴユウの態度には敢然たるどころがないといふ攻撃を受けた」。「しかし幾ら何といはれても、私は罪のない少女たちのあらさがしなどしたくない。」

#### 出前持ち ⑨

かむろ・創刊号・〈ノンブルなし〉・8月7日(8月5日)・禿徹発行・沢田卓爾編集・30銭

「井伏鱒二著作年表稿(昭和13年)」(『兵庫教育大学近代文学雑誌』1号・1990年1月)では現物未確認のまま掲出したが、現物を確認したので再掲する。ノンブルはないが、井伏文は1頁分。新選隨筆感想叢書『蚩合戦』(金星堂・昭和14年9月20日)に初収録され、井伏鱒二選集6『架空動物譜』(筑摩書房・1949年2月25日)に収録されたのち、筑摩書房『井伏鱒二全集』に「出前もち」と改題して収録。

「創刊之辞」の冒頭には、「同好の知人に読んでいただくために、俳句と短文の雑誌『かむろ』を創刊しました。日本特有の文学精神によつて、時節がらのジャーナリズムとは正反対の立場から、手細工の民芸品でも作るやうな、のんびりとした気持で、月々編輯する趣味の小雑誌であります。」とあり、題簽は永井荷風によるという。寄稿者には、永井荷風・佐藤春夫・内田百閒・室生犀星などの名前が見える。

#### 昭和14年(1939)

〈無題〉=昭和十四年七月一日(土曜)午後七時!／あなたはどこにゐて、何をしてゐましたか? = \*アンケート回答

エスエス・4巻8号・p.168・8月1日(7月25日)・東宝発行所・那須藤三郎・50銭

「『井伏鱒二著作年表稿』手控え1」(『兵庫教育大学近代文学雑誌』2号・1991年1月)では現物未確認のまま掲出したが、現物を確認したので再掲する。目次には「土曜日の宵を如何に過したか／名土回答」とある。\*「荻窪八丁目通りの四面道の夜市で、桔梗の植木鉢を手に持ち、高島易判断の演説を立ちぎきしてゐました。」以上井伏回答全文。

#### 昭和15年(1940)

##### 多甚古村の巡查

新国劇・23号春季号・pp.30~31・1月5日(昭和14年12月30日)・新国劇事務所・加藤

勝弥・35銭

「『井伏鱒二著作年表稿』手控え1」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』2号・1991年1月）では現物未確認のまま掲出したが、現物を確認したので再掲する。本文中に「（甲田巡查辰巳）」とキャプションの付された、辰巳柳太郎の舞台写真が掲げられている。なお、本号には、井伏文のほか、「口絵写真」の内に「多甚古村」があり、「特写」の内に「『多甚古村』触目吟」と「紙上舞台・多甚古村」があり、さらに「【新作物語】」として「多甚古村」の粗筋が紹介されている。\*『多甚古村』名古屋御園座公演（高田保脚色）中の新国劇から初日大入りの電報を受けた。有楽座での公演十日目には、高田保を中心に句会を催し、寄せ書きをモデルの巡査に送ったところ、丁重な礼状が来た。その礼状には、寄せ書きへの礼とともに、新国劇大阪正月公演の時には公休なので、見物に行きたいという希望も述べている。大阪公演には必ずやモデルの巡査が出向くであろうと思う。

## 昭和16年(1941)

### 遊び場の子供たち

国民六年生・21巻8号・pp.136~149・11月1日（10月8日）・小学館・相賀寿次（相賀ナヲ）・50銭

「『井伏鱒二著作年表稿』手控え1」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』2号・1991年1月）では現物未確認のまま掲出したが、小学館編集総務部資料課の御好意によりコピーを頂戴したので再掲する。挿画・吉田貫三郎。なお、136頁は標題と挿画のみ。\*「いつたい夏休み中の学生町は静かである。」「そして静かになったこの鶴巻町界隈の町よりも、夏休み中の早稲田大学の構内はもつともつと静かである。」「ところが、真昼のこのひつそりとした早稲田大学の構内に、いつものやうにまぎれこんで来る四五人の子供の群れがある。みんな学校の近所の子供であるこの子供たちは、図書館の裏口近くに集まって、こゝを涼しい陽かげの遊び場所を選んでゐる。」十日以上降り続いた雨がようやくやんだ「その日、子供たちは久しぶりに図書館の裏口の遊び場に集まった。」絵本を読んでいたところ、夏休みだというのに、大勢の学生が乗ったバスを子供たちは目にする。「学生たちがぞろぞろそのバスから降りて行き、彼らはみんな広場の突きあたりの大隈講堂の方へいそいで行つた。」子供たちが大講堂の入り口から中の様子を窺っていると、講堂の拡声器から「諸君、今日突然発送した通知でありましたにもかゝらず、かくのごとく、この大講堂にあふれるまで、諸君が集合されましたことは、私の感激にたへないところであるとまうさねばなりません。これは正に、国家危急存亡のこのときに際し、われわれ学生もまた国家の一員であることを諸君が固く認識してゐる一つの現れであると痛感いたしましたやうな次第であります。」云々という演説が聞こえてくる。しかし、途中までこの演説を聴いたところで、子供たちは、学生監にその場を追われる。子供たちが演説の真似をしていると、今度は学生たちが分科別に分かれて教室に入って行つた。文科の学生たちが入つて行つた二十

二番教室の側で子供たちが立ち聞きすると、第三部隊となった文学部の編成上のことについて、文科部長の演説する声が聞こえて来た。子供たちの一人がサンダルを落として廊下に大きな音を立てたので、子供たちは驚いて逃げだした。

## 昭和17年(1942)

南方文化建設の一年—昭南で成果を語る我が文化戦士—文化欄＝ \*座談会

東京日日新聞朝刊・23848号・4面・11月28日

新たに奥出健「徴用作家の戦争—ビルマ、マレー方面班を中心に—」(『近代文学研究』<日本文学協会近代部会>8号・1991年5月20日)によって知り、現物を確認したので掲出する。出席者としては、「井伏鱒二(作家)報道班員・寺崎浩(作家)報道班員・海音寺潮五郎(作家)報道班員・中村地平(作家)報道班員・小栗虫太郎(作家)報道班員・北町一郎(作家)報道班員・荒木竊(作家)報道班員・神保光太郎(詩人)報道班員・塚本国太郎(画家)報道班員・小出秀男(映画人)報道班員・【本社側】松枝支局長ほか各特派員」と紹介されている。開催場所は「昭南閩南クラブにて」とある。小見出しを以下に掲げる。「打てば響く日本語ポスター」「街頭の五十音」「影なき固有文化/技術的の方向ならば伸びる/マレー現住民の性能」「模倣の巧みさ」「日本のものなら/何でも受入れる用意」。

## 昭和19年(1944)

昭南日本学園

中学生・28巻2号・pp.18~21・6月1日(5月25日)・研究社・小酒井益蔵・40銭

「『井伏鱒二著作年表稿』手控え1」(『兵庫教育大学近代文学雑誌』2号・1991年1月)では現物未確認のまま掲出したが、高崎隆治氏からコピーを頂戴したので再掲する。\*徴用中に知ったマライ・シンガポールの学校の事情について、「内地」の学校の程度と比較しながら記し、「植民地は単に自分の利用に供するといふのが英国人の方針であつた。したがつてマライの現地人は英国人の犠牲になる状態に置かれて、子弟の学校教育は父兄や子弟の気休めにすぎないとする風儀が残つてゐるやうに見えた」との感想を記している。また、生徒として「小学校を卒業した現地人(マライ人、印度人、支那人混血児など)の青年男女が三百人近く」、さらに、「小学校の現地人校長や教頭に日本語を教へる聴講科を置き、これの聴講生が百三十人ばかりゐた」という「昭南日本学園」の様子を、日本語の通用ぶりとともに綴る。そして、「暫くのあひだ昭南日本学園の聴講科で日本歴史の講義をしてゐたが」、不人気で聴講生も減り、付いていた通訳も辞めるといふので、「私」もその講義をよしてしまった事情などについても記す。

旅客と駅手＝文壇人の決戦輸送見たまゝの記＝

交通東亜・5巻?・pp.5～7・7月?

新たに林眞氏の御助力によりコピーを見ることのできたので掲出する。\*「このごろ私は、汽車や電車のなかは一種の修羅場と心得ることに定めてゐる。冗談ではなくさう思つてゐる。何かことが起つても『相すみません。』と謝まることに方針を定めてゐる。さもなければ、私はいまの世に大切なものを、幾らかでも損傷する結果になりはしないかといふおそれがある。」「ところが反対に、出札係や鉄道員をやりこめる人があるのを見ることがある。私は先日でも地方の或る小さな駅でその一例を見た。」余程急ぎの用事を抱えているらしく、一人の男が、発車間際に出札口に駆け込んで来た。が、その男に急かされた年若い女の出札係が運賃の計算に手間取つたために、男は汽車に乗り遅れてしまう。男は、出札係相手に立て続けに文句を言い、また近くの男にも革命前のスペインの鉄道事情を持ち出して嘆いてみせた。それは先月末のことだったが、また、「今年の三月下旬にも、私は大いに演説する乗客を見た。」乗客の多くが立川行きの電車と信じて、車庫止まりの電車に乗ってしまった時のことであつた。車庫に入って車内が暗くなつて、乗客たちは車庫止まりの電車に乗つたことに気づいたのである。一人の男が乗客たちを前に、電車の運転手に対する抗議の演説を始めた。ところが、車内の電灯が明るくなると、演説していた男は口を閉じて、窓ガラスの外に顔を出してしまつた。電車がプラットフォームまで引き返すと、演説していた男はみんなの後から降りて、「次の立川行きの電車を待つ間、柱のかげに立つて深くうなだれてゐた。」

山上陣地

新若人・5巻9号・pp.41～43・9月1日(8月23日)・旺文社・池田佐次馬(赤尾好夫)  
・定価45銭(特別行為税相当額3銭・売価48銭)

「『井伏鱒二著作年表稿』手控え1」(『兵庫教育大学近代文学雑誌』2号・1991年1月)では現物未確認のまま掲出したが、高崎隆治氏からコピーを頂戴したので再掲する。本文冒頭に二字分下げて、「これは一人の出征軍人が通信を書いてよこしたものである。従つて随筆ではない。」という一文があり、本文末尾に「(第一信)」とある。「九百三十高地」に駐屯して、山上の陣地構築に当たつている「自分」(この「九百三十高地」に派遣された分隊の分隊長であるらしい)の手記。「通訳代り兼雑役として来た中国人」で、「なかなか勤のいゝ子供」のこと、「岩石爆破」作業の様子、「被服個人修理の技に秀で、蒟蒻豆腐の製造も名人」である三神一等兵のこと、三等通訳の中国人で、陳家庄の出身であるところから「陳太郎」と名付けた男が蠍に刺された騒ぎなどを記す。舞台や登場人物の設定・名称等は、「九百三十高地」(『少国民の友』21巻8号・昭和19年11月、21巻9号・昭和19年12月、21巻11号・昭和20年2月を確認)と重なるところがある。

昭南所見＝随筆＝

大東亜文学・1号・pp.72～77・11月1日(11月1日)・日本電報通信社・斎藤一寛

新たに山内祥史氏の御教示によって知り、初出現物を確認したので掲出する。表紙には「日本文学報国会編輯」とある。この『大東亜文学』については、山内祥史「解題」（『太宰治全集』第7巻・筑摩書房・1990年6月27日）に、同誌に掲載予定だった太宰治の「竹青」との関連において詳しく述べられている。「華文文芸雑誌『大東亜文学』創刊 — 堂々たる編輯内容 —」（『文学報国』第34号・昭和19年9月1日）には、「『昭南所見』（新作十五枚）井伏鱒二」として紹介されている。本誌には中国語訳で掲載されているが、上記のように『文学報国』の記事では、「新作」となっている。日本語原文が別のところに掲載されたか否かについては未確認。但し、「昭南市の大時計」（『東京日日新聞』昭和17年6月27日朝刊）、「昭南タイムス発刊の頃」（『サンデー毎日』昭和18年1月17日）、「徴用中のこと」（『海』・1977年9月～1980年1月）等と一部重なるところがある。\* 胡邁の新刊の「華僑新生記」を読んで、マレーのことを思いだした。シンガポール陥落直後昭南タイムス社長として勤務した当時のこと、昭南タイムスの記者で英文速記やタイプライターの上手だった華僑のタントンハイのこと、ユーラシアンの記者・レンベルガンのこと、また、旧シンガポール市公会堂時計塔に掲げられた看板のこと、マレー人の使用人アブバカのことなどを記す。

#### 冷凍人体

大東亜文学・2号・pp.2～22・12月1日（11月25日）・日本電報通信社・斎藤一寛

新たに山内祥史氏の御教示によって知り、現物を確認したので掲出する。「頓生菩提」（『改造』16巻13号・昭和9年12月1日。後、「冷凍人間」と改題。筑摩書房『井伏鱒二全集』第1巻など所収）の中国語訳。